

あゆ・鮎・年魚

大昔から川魚の中で、「あゆ」は一番のごちそうでした。

現在、私たちが「あゆ」と呼んでいるその魚も古代から『アユ』と呼ばれていました。

「(川を) 下る」の意の「アユル」から「アユ」と呼ばれるようになったという説があります。

そして仏教と共に伝来し、汎用化されるようになった漢字で「年魚」と記されるようになりました。古代の人たちも「アユ」の生涯は一年であることを知っていたからです。

しかし、海に下らない「アユ」もいます。

その一つは琵琶湖河川の「コアユ」と呼ばれる鮎です。ヤマメのように海に下らない習性となり、体が小さくなったと。

もう一つは、六十年くらい前の川には、普通の「アユ」よりも倍も大きな「アユ」がいました。「越年アユ」と称されていました。ほとんどの仲間と違って、どうして海に降らないのか興味あります。どんな生物の世界でも異端児がいるということでしょうか。

そして「あゆ」は「鮎」と記されるようになりました。

「あゆ」が抱卵期に縄張りを主張するようになることから、占領の意の「占」を片付きとして、鮎と記されるようになったとか、「占」を占う意にとって鮎ときされるようになったとの説があります。

日本で最も古い書物である古事記、日本書紀それに万葉集にはすでに「鮎」の表記が見られます。

古事記

古事記では、第十四代・仲哀天皇の皇后・神功皇后が、天皇崩御後に、自ら指揮された新羅征討が、完了して帰国途上に、筑紫の末羅縣(松浦)の玉島の里の川で食事をされた時に、飯粒を餌にして、「あゆ」(年魚)を釣ったという謂れが記録されています。この古事記の物語では年魚と記されています。

この故事に倣ってこの地方では女性が「あゆ」を釣る風習ができたと結んでいます。

神功皇后が釣りをされた時期が「四月上旬」と記されていることから、現在の暦では五月上旬に相当することから、遡上したばかりの「あゆ」で雑食性の時期であったことが読みとれます。

日本書紀

日本書紀にも同じような話が記されていますが、内容は異なります。神功皇后が新羅征討の途上に肥前国松浦縣の玉嶋里の小河で釣りをされるのですが、征討が成功するかどうかを占うために釣りをしたことになっています。

請願成就を思わせるように、魚が釣れるのですが、皇后以下お供の者もその名を知りませんでした。その時、この魚は「細鱗魚」と称されています。

同じ物語の中に古事記のようにこの川では女性が釣りをする風習ができたことを記しているのですが、その文章には「年魚」と記されています。

「細鱗魚」が「あゆ」の描写としては適切です。

古事記・日本書紀ともに「あゆ」は「年魚」と記されていますが、日本書紀のように新羅征討の占いのために釣れた「年魚」なので「鮎」と表記されるようになったと考えることの方が説得力があります。

万葉集と鮎

万葉集では年魚（鮎）を詠んだ歌が四首（卷三・四二五、卷六・九六〇、卷十三・三三三〇、卷十九・四一五六）、鮎に因んだ年魚市潟が二首（卷三・二七一、卷七・一一六三）、年魚道が一首（卷十三・三二六〇）それに若宮魚年麻呂の歌が四首の総計十一首の歌があります。

それに鮎と記した歌が二首（卷十三・三三三〇、卷十九・四一九一）があり、残りの鮎あるいは小鮎と記された歌の原歌は「安由」「和可由」と万葉仮名化された歌が十二首あります。合計すると関連歌は二十三首です。

従って、万葉時代（年代が明確な歌を例にとれば天平二年（七三〇）には、鮎は「アユ」と呼ばれていたことがはっきりしています。

古事記の仲哀天皇記・神功皇后項では漢文中に「年魚」と記されて

います。

代表歌として巻十三・三三三〇番（挽歌）のみ掲げます。
この歌には「年魚」と「鮎」が同時に詠み込まれています。

☆巻十三・三三三〇

隠口こもりくの 泊瀬はつせの川の 上つ瀬かみに 鶉うを八頭潜やつかづけ 下つ瀬しもに

鶉うを八頭潜やつかづけ 上つ瀬かみの 年魚あゆ（原歌…を食はしめ 下つ瀬しもの

鮎あゆ（原歌…鮎）を食はしめ 麗くはし妹いもに 鮎あゆ（原歌…年魚）を惜をし

み 投なぐる箭さの 遠離とほざかり居いて 思おもふそら 安やすけなくに 嘆なげく

そら 安やすけなくに 衣きぬこそば それ破やれぬれば 継つぎつつも

またも合あふと言いへ 玉たまこそは 緒いとの絶たえぬれば 括くりつつ

またも合あふと言いへ またも逢あはぬものは 妻つまにしありけり

その二 神功皇后の鮎釣りの故事を知って詠んだ大伴旅人の歌（巻五・八五五から八五九、それに八六一と八六三）の中の一首を掲げます。

☆巻五・八五七

▼遠とほつ人松浦の川がわに若鮎わかゆ釣いる妹いもが手本たもとをわれこそ巻まかめ

（遠い人を待つ 松浦川で若鮎を釣るあなた（女性）の腕を私こそ枕にして寝たいものよ）

注）古事記・日本書紀の故事が天平二年（七三〇）初期に詠まれた大伴旅人の歌の中に詠み込まれています。

「若鮎」は原歌では万葉仮名化され、「和可由」（わかゆ）と記されています。

「鮎」のはてな？

一 鮎は川と海を回遊します。

淡水と海水で生きられる珍しい魚です。「うなぎ」もそうですね、鮎に限れば、産卵するのは、まだ川の領域です。

高知県の中村平野を走り、土佐湾の南西端の海に注ぎ、今でも清流で有名な四万十川では、河口から十三、四キロメートルの上流で、鮎は卵を産むそうです。卵を産んだ親鮎はそこで生涯を閉じます。

この流域は、アカメのような非常に大型の海生魚がとれるそうですから、潮の変化もあって海水が、こまで混じり合っているのですね。そして、生まれて稚魚にまで成長した鮎が海に下っていくのです。餌が豊富にある海を成長するまで、棲家を選んだのです。

河川水が流れ込む、比較的塩分の薄い水域かもしれませんが、「鮎」は海水でも淡水でも生きられる働きを体に会得したのです。

そして、初夏になると、川を遡上するようになります。

餌の量を確保するためだけであれば、海に生き続ける方が楽です。そのように考えると、鮎は成長と共に、海には住めない体になっていくのでしょうか。

鮎が本来有していた遺伝子の働きが淡水魚に変化させるのでしょうか。

一方、「うなぎ」はフィリッピン海峡の深海で産卵します。そして稚魚の内に、ふるさとの川に向かうのです。

どうして、海と川を回遊する魚でもこうも習性が異なるのでしょうか。考えてみて下さい。きっと面白い研究になります。

二 鮎は稚魚の内は動物性プランクトンを食べ、成魚に成長すると川の中の石に生える「こけ」（植物性）に食物を切り替えます。

五月頃までは、鮎は疑似針で釣れますが、八月頃になると、釣れなくなり、鮎の成魚が縄張りを死守するという習性を利用して「友釣り」が盛んになります。

どうして鮎はこんなに完全に食性が変わるのでしょうか。

子孫の産卵のためであることは、容易に想定できますが、海に入っ
ていける素質を稚魚に与えるためでしょうか。

三 通常は川と海を回遊する鮎も川、湖（淡水）で生涯を終える鮎
もいます。琵琶湖の「こあゆ」はその代表です。

同じような例は、ます、さけの中までの「やまめ」もそうです。

餌の量と思われますが、体を小さくして世代交代していくのです。
川と海を回遊する習性を封印しているのです。

天災等で封じ込められた鮎ややまめは習性を封印してまでも生き
延びているのです。自然の中に、環境が激変したのに逞しく生きて
いる生物が沢山ありますが、鮎にもその逞しさがあります。